

I 学校の概要

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現推進モデル校事業

観音寺市立大野原小学校

◆児童数及び教員数

○児童数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全校
3学級 76名	2学級 50名	3学級 77名	3学級 79名	3学級 95名	2学級 70名	5学級 34名	21学級 481名

○教員数 32名

◆学校の特徴

本校の児童は明るく素直であり、学習面においても与えられた課題に真面目に取り組むことのできる児童が多い。また、これまで「きくこと」に重点を置いて研究を進めてきたため、友だちとの意見交流を好み、意欲的に取り組める児童がほとんどである。その中で、友だちの意見を肯定的に受け止めることもできるようになり、受容的な学級風土が培われている。

令和6年度には道徳教育地域支援委託事業を受けての研究を進めてきた。その結果、県学習状況調査の質問紙調査の「学校が好き」「自分の学級が好き」などの項目において肯定的な回答が90%を超えており、道徳教育での研究の取組みが少しずつ児童に浸透しているのではないかと考えられる。

II 研究主題等

研究主題

共に分かち合い、生き生きと自己表出する児童の育成

～個の可能性を引き出す授業づくりを通して～

◆研究主題設定の理由

令和6年度、道徳教育地域支援委託事業を受け、「きくこと」のさらなる充実に向けて、「きき合いタイム」等のスキル向上を基盤に、ICTを活用した交流場面やきき合う場面を工夫した授業展開について研究を進めてきた。その中で、児童は、互いの考えを聞き、粘り強く最後まで取り組むことができるようになってきた。一方で、生き生きと大きな声で自分の考えを発表するなど、自己表出することにおいては課題が残っている。また、主体性をもって意欲的に学習に取り組むことのできる児童と学習意欲の低い児童との二極化も進んでいる。そこで、今、求められている「個別最適な学び」や「協働的な学び」の視点も踏まえ、異なる立場との共存の中で、共に分かち合いながら、生き生きと自己を表出していく児童をめざしたいと考えた。その中でも特に、個の可能性を引き出す授業づくりについて研究を深めていくようにする。

◆研究内容及び方法

視点1 児童主体の単元構成や学習課題

- 児童に何ができるようになるとういかが分かる見通しのもたせ方
- 主体的に学びたくなる課題設定
 - ・ 児童の実態や、児童が何に興味・関心があるのかを把握することで、児童が主体となる単元構成や学習課題の設定をめざす。
 - ・ 教材との出合わせ方を工夫することで、児童の「学びたい」を引き出す。そのうえで、単元や本時のゴールを児童と共有することで、主体的に学習に取り組むことができるようにする。
 - ・ 単元計画を立てる際には、児童の意見を取り入れたり、児童それぞれが選んだ題材を用いたりすることで、児童の学ぶ意欲を高める。
 - ・ 児童が自ら学びを進めることができるように、表現物を作る際には、枠や見本となるものを提示するなど、教師のしかけを工夫する。

視点2 自己表出を促す教師の支援

- 主体的な対話を生む発問
- 自己選択・自己決定ができる場の工夫
 - ・ 児童が友だちと違う選択をすることや、間違ふことを恐れずに自己選択・自己決定ができるよう、受容的な学級風土を培う。
 - ・ 児童同士の話し合いに必然性が生まれるようにするため、教師と児童のやりとりが一問一答とならないように発問をしたり、教師がゆさぶりをかけたりする。
 - ・ グループでの話し合い活動などを設定する際には、何のために話し合いをするのか目的を明確にすることで、話し合いの必要感をもたせる。
 - ・ 自己選択・自己決定の場を設定することで、多様な考えや発想を生み、友だちと意見を交流したいという意欲をもたせる。
 - ・ 個人での学習、ペア学習、グループ学習など多様な学習形態を児童が必要に応じて選ぶことができるような場を設定する。
 - ・ 練習問題の選択や、表出方法の選択など、児童の発達段階を踏まえたうえで、ICTの活用を含めて自己選択の場を設けるようにする。

視点3 児童が自己調整する振り返りの時間

- ・ 本時を通して自分ができるようになったことを確認するための振り返りの時間を設定する。その際、振り返りの観点として、「わかるようになったこと・できるようになったこと」「友だちから学んだこと」「次に学習したいと思ったこと」などを示す。
- ・ 友だちの説明を聞いて分かりやすかったところなどを確認することで、次の時間以降の自分の学びに友だちのよさを取り入れられるようにする。
- ・ 本時や単元の途中で中間評価を設定したり、教師がフィードバックを行ったりすることで、自分の学びの現状を把握し、その後の学びの調整をすることができるようにする。

Ⅲ 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組み

2 (児童質問紙) 授業では、学級やグループの中で自分たちで課題を立て、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して発表する学習活動に取り組んでいますか。

指標 「①取り組んでいる+②どちらかといえば取り組んでいる」の合計



指標の達成に向けた実践

(1) 子どもに委ねる課題づくりや単元計画

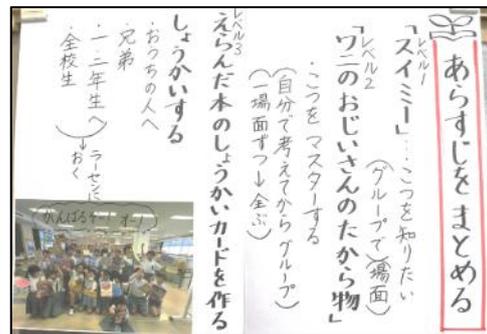
単元や授業の導入時に、単元の学習計画を児童とともに作成するようにしたり、授業のめあてに児童の言葉を用いたりすることで、児童が課題を自分事として捉えられるようにした。これについては、教員アンケート「普段の授業で子ども主体の活動を取り入れたり、子どもの考えを生かした学習活動を設定したりしているか」の項目で、5月には肯定的な回答が70%だったのに対し、11月には100%となっており、教員の意識改革が授業改善につながったと考えられる。

3年国語科では、以下のような流れで単元計画を児童と共に作成した。

児童と教科書を見ながら「あらすじをまとめる」という単元目標を確認する。

児童「教材文が長くて難しそうだ。」
教師「それなら、教科書教材の文の前に、他のお話で練習をする？」
児童「したい。『スイミー』で練習したい。」

単元計画に『『スイミー』のあらすじをまとめる』を設定する。



【教室に掲示した単元計画】

児童から出た意見を計画に反映させたことで、児童は「それならできそうだ。」という見通しをもつことができた。さらに、自分たちの意見が採用されたことで、非常に意欲的に学習に取り組むことができた。

(2) 意図的に仕組む児童に委ねる場面

各教科で児童に委ねることを意識した授業づくりに取り組んだ。教師との一問一答にならないよう留意して大きな問いを投げかけ、個人やグループに解決を委ねるようにした。そうすることで、児童自身が解決に必要なものを考えたり、既習に立ち返ったりする姿がみられた。また、目的意識をもったグループ活動ができるようになり、考えの違う友だちに自分の考えを説明するため、より学びを深めることができるようになった。

3年理科では、どのような物が磁石に付くのかを調べる際に理科室内の物を自由に調べる時間を設定した。そうすることで、金属に付くと思っていたのに、水道の蛇口には付かないことを発見し、そこから新たな課題が生まれることで、鉄にしか付かないという性質を発見することができた。



【グループで課題解決に取り組む児童】

1 (児童質問紙) 授業の内容がどの程度わかりますか。

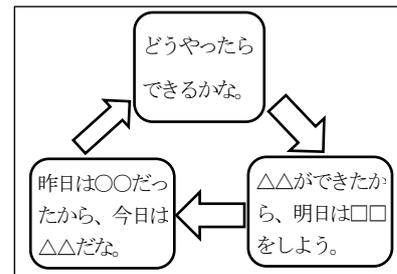
指標 「①よく分かる+②だいたい分かる」の合計



指標の達成に向けた実践

(1) 自己選択を意識した授業づくり

7月に香川大学教育学部の岡田涼先生に校内研修で講話をしていただいた。右図のような学習のサイクルを児童自身がまわせるようになることをめざし、意欲を高めるための手立てとして自己選択の場を設定することや達成感をもたせること、学び方を意識させることなどを教えていただき、これらを意識した授業づくりを進めるようにした。



【学習のサイクル】

(2) 子どもに委ねる学び方

学習形態には「教師にヒントをもらう」「自分で考える」「友だちと相談する」という3つが考えられるが、どの学び方が適しているかは、児童や課題によって違う。そこで、自己解決の時間の使い方を以下のように変更した。

- 教師が時間を設定する。
 - ・自己解決3分、その後、話し合い4分
- 自己解決の時間の使い方を児童に委ねる。
 - ・まとめて7分 (児童の要望で時間を決定)
 - ・7分の中で学び方は児童が選択し、随時変更しながら取り組む。(右図)

- ・教師の支援やヒントコーナー
- ・一人で考える
- ・友だちと考える



始めはどうすればよいかと戸惑う児童も見られたが、すぐに慣れて自分から課題解決のために動き出せるようになっていった。このように学習の方法についても子どもに委ねることで、十分な時間の中で教師からヒントをもらって自分で考えたり、困ったら教師や友だちに相談したりできるようになり、結果的に自分の疑問を聞きやすい相手に、教えてほしいタイミングで質問できるようになってきた。

(3) 達成感を得られる練習問題の準備

5年算数科「面積」の授業では、全員で共通課題の面積を求め、「既習の図形にすることで、どのような多角形の面積でも求められる。」というまとめを導き出した。そのうえで、簡単な中間評価で自分の理解度を振り返り、それに応じた練習問題を選択して取り組むことができるようにした。

レベル1の練習問題を共通問題と同程度か、それよりも簡単にしておくことで、「1つは自分の力で問題を解くことができた。」という達成感を味わうことのできる児童が増えた。また、練習問題の他に、難易度の高いチャレンジ問題を用意しておき、自己評価が高かった児童は「チャレンジ問題まで解けた。」という充実感を味わうことができおり、授業時間外に挑戦する児童も出てきた。

10 (児童質問紙) 授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していますか。

指標 「①そう思う+②どちらかといえばそう思う」の合計



指標の達成に向けた実践

(1) 子どもに委ねる表出場面

自分の意見の表出方法について、口頭での発表に限らず、ICT を活用してノートや作成物を写すなど、様々な表現方法があることを教師が提示することで、児童がそれらを活用できるようにした。また、自己解決の時間が十分に設定されており、その中で自由に友だちと関わることができるため、分からない友だちにどうにか伝えようと図を描いたり教科書を見せたりと工夫する姿が見られ、それが発表の中にも活かされている。

6年社会科「明治の国づくりをすすめた人々」では、明治維新について学習した際、日本が欧米諸国に追いついているかどうかを単元の軸に据え、学習を進めた。本時で「国会開設のための10年は必要だったか」という問いに対して、立場を明確にして話し合う活動を設定すると、児童は教科書や資料集、壁面にある関係資料を根拠とし、思い思いに説明をした。また、なかには数名で寸劇を行い、歴史上の人物や西洋諸国の考えを分かりやすく表現しようとする児童もいるなど、多様で創造的な表現方法が児童から出された。



【根拠となる資料を指しながら発表する児童】

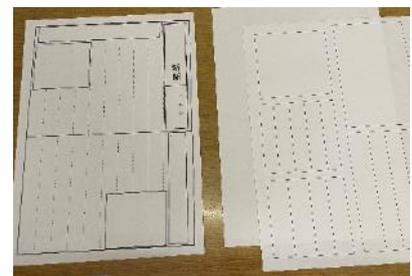
このように多様な表現方法のそれぞれのよさを教師が認め、価値づけることで、受容的な学級風土が広がり、さらに表現の幅が広がっている。

(2) 表現方法の自己選択

児童が調べたことをまとめるような活動では、複数の表現方法を提示し、自己選択しながら進められるようにしている。手書きかタブレットを使用するか、どの大きさの用紙にするか、レイアウトはどうかなど、児童自身が選ぶことを通して見通しをもち、活動に取り組めるようになっている。

3年社会科「事故や事件からくらしを守る」では、単元の最後に一人ひとりが学んだことを新聞にまとめる活動を設定した。新聞づくりの際には、教師の用意したレイアウトを使うか、自分で自由にレイアウトするかを選択できるようにし、写真上のように様々な枠を用意した。書くことに抵抗のある児童はレイアウトされた枠と写真を選ぶことでスムーズに活動に取り掛かることができていた。

一方、活動を得意とする児童は自分で好きな幅に罫線を引いたり、写真の必要な部分を切り取ったりしながら、多くの内容について書くことができていた。書きたい内容に合う写真がなければ自分で絵を描くなど、用意されたものに限定されない意識が育っている。似たような活動を繰り返し行うことで、自由な表現を選ぶ児童が増えている。



【多様な表現方法】

5 (児童質問紙) 学級の友だちと話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。

指標 「①できている+②どちらかといえはできている」の合計



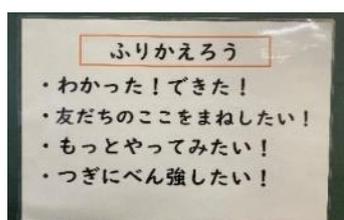
指標の達成に向けた実践

(1) 話し合い活動の積極的導入

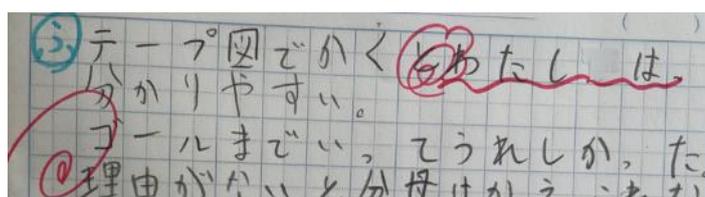
先に述べたように、学習形態の選択ができるようになったことで、自己解決の時間に友だちと話すことができるようになった。また、教師が児童に委ねる授業づくりを意識したことで、児童から「相談する時間をください」と提案されることも増え、授業における話し合い活動の機会が増えている。児童のアンケートでも、「授業で話し合い活動をよく行っているか」に肯定的に答えた割合は9割を超えた。

(2) 振り返りの観点の設定

児童が自分の学びを自己調整できるよう、振り返りの際には観点を設けて振り返る活動を行っている。基本となる観点(写真左)を各教室に掲示しておき、教科や単元によって観点を新たに設定するなど、柔軟に変更しながら使用している。



【振り返りの観点】



【学び方について振り返りが書かれた児童のノート】

3年算数科「分数」の授業では、同分母分数の足し算について考える際に、どの図を使って学習するかを自己選択させた。児童はテープ図、線分図、液量図など、単元内で学習した図を使って思い思いに考えを練り、友だちとの交流を通して複数の図で自分の考えが通用するかを確認し、全体交流で共有した。引き算でも同様の方法で学習を進めた。単元全体を振り返る場面では、「どの学び方がよかったか」という観点を設定したところ、「私はテープ図が一番わかりやすい。」(写真右)など、自分に合った学び方を獲得している児童もみられた。様々な方法で考え、それらを比較したからこそ得られた自分に合った学び方である。

(3) 中間評価の有効性

振り返りのタイミングについては、単元や授業の終盤だけでなく、中間評価を意識して取り入れている。学習や活動の途中で自身の学びを振り返ることで、振り返りで得た気づきをその後の活動に取り入れ、自己調整の力を育てるようにした。

1年国語科「おおきなかぶ」では、場面の様子を考えながらペアで音読劇をする言語活動を設定した。それぞれの発表を見てよかった点を共有した後、もう一度練習してから本番の発表とした。中間評価でよさを共有していたため、友だちのよさを取り入れて発表したペアや、工夫点が増えたと振り返る児童も多く見られた。



【音読劇の中間発表】

IV 研究の成果と課題

研究の成果

○研究指標である10項目のアンケート全てにおいて肯定的回答の割合が大きく増加した。

児童アンケート 項目	5月	11月	増減
授業の内容がどの程度分かりますか。	71.5	83.6	+12.1
授業では、学級やグループの中で自分たちで課題を立て、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して発表する学習活動に取り組んでいますか。	68.4	85.2	+16.8
授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていますか。	82.1	88.7	+6.6
普段の授業では、学級の友だちとの間で話し合う活動をよく行っていますか。	84	91	+7
学級の友だちと話し合う活動を通して、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。	73	84.8	+11.8
授業で自分の考えを発表する機会には、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫していますか。	61.4	80.3	+18.9

教職員アンケート項目	5月	11月	増減
児童の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしていますか。	88	95	+7
普段の授業で、児童の学び合う場を取り入れていますか。	77	88	+11
普段の授業で、児童が自己選択できる場を設定していますか。	48	95	+47
普段の授業で、子ども主体の活動を取り入れたり、子どもの考えを生かした学習課題を設定したりしていますか。	70	100	+30

○ 児童主体の課題設定を意識した授業づくりを全職員が意識したことで、教員が児童の意識の流れをより大切にするようになった。児童には自分たちがつくった課題であるという意識が芽生え、学習に対して意欲的な児童が増え、授業が活発になった。

○ 自己選択・自己決定を意識したことで、授業に主体的に参加する児童が増えた。特に、授業への参加が難しかった児童が参加できるようになってきている。また、児童自身が決定するという意識は常時活動や生徒指導面でも生かされており、学校のルールの見直しや、学校全体の課題にどのように取り組むかなどを児童自身が考えるようになってきた。

〈香川の教育づくり発表会でいただいたご意見〉

- 「児童に委ねる」という意識を教師がもつことや、自己選択・自己決定の場を設定することが、児童の思いを大切にしたい授業につながり、「自分で選んだからがんばろう」という児童の意欲につながると感じた。
- 中間評価を取り入れることで、自分の理解度を客観的に振り返る機会になると感じた。振り返りを言葉で書くのは時間がかかると思っていたが、数値や◎○△などのマークで簡単に振り返るなら取り入れられそうだった。振り返りレベルに合わせた練習問題があるのがさらによいと思った。

研究の課題〈香川の教育づくりでいただいたご意見と、改善策〉

- 自己選択の選択肢や、習熟度に応じた練習問題を毎回用意するのは教師の負担になる。→ICTの活用を推進することで、印刷等の手間を省くようにし、児童が自分のタイミングでアクセスできるようにする。また、選択肢を全て教師が用意せず、どのようなものがあればよいかを児童とともに考えるようにする。
- 自己解決の時間に自分で学ぶか友だちと学ぶかを子どもに委ねて選択させると、自分の考えがもてない児童が増えるのではないかと。また、グループの固定化につながらないか。→すぐに友だちと話す児童は一定数いるので、授業によって一人学びの時間を確保する。また、グループの固定化についても、常に自由ではなく、この単元は班のメンバーと話すなど、児童に委ねることは意識しつつも、児童の様子に合わせて支援の在り方を今後も工夫していく必要があると考える。
- 基礎学力や基本の学び方を知ることで、より研究を深めることができると考えられるので、次年度は中間評価をさらに子どもに委ねることや、学年に応じた学び方の系統性をまとめていくことをしていきたい。